令和７年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属：スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格：准教授
氏名：田中　竹史

研究課題名	言語機能からヒト科ヒト属の認知能力を探る
研究目的及び研究概要	0. 研究の背景 Mora et al. (2011) によると，地球上には真核生物が約874万種存在すると推計されている。それらの多様な生き物のうち，ヒト（ヒト科ヒト属）は唯一ことばの使用が可能な生物種であり，ことばはヒトという存在を際立って特徴づけている。たとえ進化の隣人であるチンパンジー（ヒト科パン属）のように，学習能力が高く様々な点でヒトに比肩しうる―のみならずある側面においては凌駕するような―認知能力を持つ生物種であっても，音声言語であれ手話言語であれ言語の使用は不可能であり（松沢 2011），どんなに優れた人工知能（AI）であっても自然言語を理解することはかなわない（酒井 2022, 川添 2021）。 したがって，言語研究はヒトという生物種の特質を明らかにするのに最も有効な手段であり，とりわけ，ことばの獲得や習得に焦点を当てた研究（単一言語使用環境における母語獲得，複数言語や多言語使用環境における母語獲得，子供や大人による第二言語，第三言語習得，手話言語の獲得・習得，失語などの言語障害，認知能力に機能不全のある障害者による獲得・習得など）は認知科学の領域において重要な地位を占めている。 1. 研究の目的 本年度は前年度に実施した幼児によるCHILDESによる獲得研究を継続する。当該研究では，CHILDESを利用し母語話者の幼児による当該構文の使用状況を確認し，あわせてこの構文の統語構造の獲得に関し，大人の文法の持つ項構造や統語構造とどのように関連するのかを探る。これにより，認知科学の視点からヒトの認知能力の一端を明らかにすることを目標とする。 また，認知科学や言語学の成果に基づく外国語教育，つまり，言語機能というヒト特有の生物学的な共通基盤を意識した外国語教育，あるいは，「ことばへの気付き」という概念を中心に据えた母語を活かした外国語教育の可能性も探る。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	2.　得られた成果 いわゆるwanna縮約についてはこれまで多くの議論が展開されてきたが，そのほとんどがwant toとwannaを音韻形態的過程や統語的操作によって関係付けている。 しかしながら，本研究ではCHILDESからのデータに基づき，want toとwannaは別個の語彙項目であり，以下のようにそれぞれ異なる統語構造を持ち，その違いが幼児による両者の獲得過程に影響を与えているという可能性を追求した。 (1) a. [TP [DP Subj] T [ModP Mod [FP F [vP v [VP want [CP PRO [TP to [vP v [VP V... b. [TP [DP Subj] T [ModP Mod [FP wanna [vP v [VP V... wannaとwant toの分布に関する調査から得られた結果は次のようなものである。(i) wannaの獲得がwant toの獲得に先行する傾向が見られる（二項検定）。(ii) 全体として，大人による発話ではwant to (71.9%) の方がwanna (28.1%) よりも豊富に見られる一方，幼児の発話ではwanna (60.4%) の方がwant to (39.6%) よりも優勢である（χ二乗検定）。 これらの統計的事実は，幼児に対する言語的インプットが直接的に獲得過程を決定してはいないことを示している。また，wanna縮約において特別な形態・統語的操作を仮定するアプローチの基では自然な説明を与えることが困難である。(1) の提案を指示するものである。 3.　研究実績等 上記成果は，その一部を研究論文として公刊予定である。 ・TANAKA (to appear) "Another Look at *Wanna*-Contraction: Evidence from Language Acquisition" 『英文学論叢』第75巻